

平成 1 8 年 1 2 月 1 5 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 TEL 0428-23-6859）

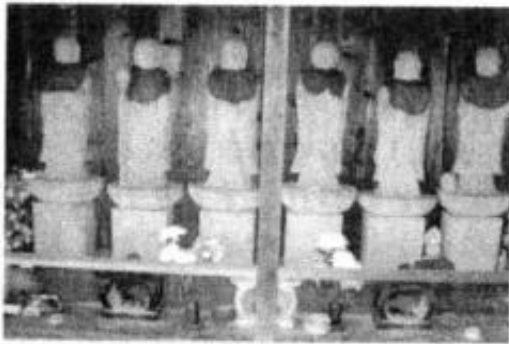
六 地 蔵 の 話

青梅市内の石仏で一番多いのがお地蔵様のお姿です。単体の地蔵像が多いのですが、お寺や墓地の入口には六地蔵様が私たちを出迎えてくれます。この六地蔵の六という数は仏教思想のひとつ六道輪廻（ろくどうりんね）の地獄・餓鬼・畜生・修羅（しゅら）・人間・天上にそれぞれのお地蔵様を配した事によります。この私達に身近でとても馴染み深い六地蔵ですが、六観音（聖（しょう）・千手（せんじゅ）・馬頭（ばとう）・十一面（じゅういちめん）・不空罽索（ふくうけんじゃく）・如意輪（にょいりん）の各観音菩薩）の変化といわれます。それは「請観音経（しょうかんのんきょう）」というお経の中に説かれた、六道輪廻から人々を救済するための六観音の信仰が中国で 10 世紀頃盛んに行われていた様なのですが、日本に伝わってからは、同様に六道救済の仏として信仰されていた地蔵菩薩に変化したと考えられているものです。ですので、中国には六地蔵の絵画や造像は全く無く、日本独自の姿と云われています。因みに青梅では谷野の真浄寺に六観音の石仏、仲町の梅岩寺には七観音の石仏があります。さて、また 10 世紀末の清少納言の「枕草子」に、当時の貴族社会で信奉されていた仏菩薩を並べあげている段があり、その中に六観音の名は書かれているのですが、六地蔵の文字は見えてきません。12 世紀前半に書かれた「今昔物語集」になると、ある人が病死して冥土に向う途中、六人の小僧さん（六地蔵）に出会って生き返り、その恩に報いる為にと六地蔵像をを作って供養した話がのっていて、その前後頃から六地蔵信仰が広まって来たようです。

さて青梅市内の六地蔵の石仏の中には石幢（せきどう）と呼ばれるものがあります。これは燈籠（とうろう）の様な形をしていて、その燈籠の頭の部分に六地蔵が二体つつ3面だったり一体つつ六面にレリーフ状に彫られているものです。この形のものは丸彫りの像より古く、江戸時代初期の慶安年間に作成されたものもあります。また丸彫り像の六地蔵はほとんどが立ち姿の立像ですが二俣尾の慶徳寺にはしないで唯一の坐像の六地蔵があります。六地蔵の台座にはそれぞれ地獄・餓鬼・畜生のように六道の文字が書かれているものもありますが、法性（ほうしょう）・陀羅尼（だらに）・宝陵（ほうりょう）のような文字が書かれている場合もあります。これもいくつか種類がありますが、宗派や元になった経典によって違うようです。それぞれのお地蔵様の持っている物も国書刊行会の「仏像図鑑」によると、地蔵道の檀陀地蔵（だんだじぞう）（金剛願地蔵（こんごうがんじぞう））が人頭幢（じんとうどう）という旗のようなもの、餓鬼道の宝珠地蔵（ほうじゅじぞう）（金剛宝地蔵（こんごうほうじぞう））は宝珠、畜生道の宝印地蔵

(ほういんじぞう)(金剛悲地蔵(こんごうひじぞう))は錫杖(しゃくじょう)、修羅道の持地地蔵(じじじぞう)(金剛幢地蔵(こんごうどうじぞう))が金剛幢(こんごうどう)という旗、人間道の除蓋障地蔵(じょがいしょうじぞう)(予天賀地蔵(よてんがじぞう))は如意珠、天上道の日光地蔵(にっこうじぞう)(放光王地蔵(ほうこうおうじぞう))も錫杖となっていますが、それ以外にも合掌であったり数珠を持っていたり手持ちの高炉だったりを持ち物にも少し異同があります。この様に六地蔵の姿形や台座に書かれている文字、並んでいる配列等をじっくり味わうのもお参りの楽しさにつながるかと思います。

(文責 棚橋 正道)



千ヶ瀬・宗建寺



藤橋・福伝寺



畑中・地藏院



藤橋・宝泉寺



今井・正福寺



長瀬・玉泉寺